

# 鳥取県

## 研究協力校（課程又は障害種）

- ・鳥取県立鳥取聾学校（聴覚）
- ・鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校（聴覚）

## 研究の成果

### 観点Ⅰ：

各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

#### Ⅰ. 校内研修会及び学部研究会等による共通理解・合意形成

鳥取聾学校本校及びひまわり分校においてこれまで培ってきた聴覚障害教育の専門性を維持・継承するとともに、個々の実態を多面的に整理・分析し、自立活動や教科等を横断的に関連させた指導方法や指導体制等を工夫改善することによって、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得をはかる。また、このようにして習得した知識及び技能が生きて働く学習活動を適切に設定し、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら課題を解決していくことで、思考力・判断力・表現力等をさらに豊かなものにし、自分と学びとの関連性に気づき主体的に学びに向かう力・人間性等の育成をめざしている。

昨年度の平成 29 年度と同様に、定期的に行われる研究会や職員研修などによって職員同士の共通理解を深めている。

**観点 2：****教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価****2. PDCA サイクルの授業づくり**

当該幼児児童生徒の担任や教科担当など関係する教員で実態把握や教材研究を行い、単元や本時のねらいに迫る単元構成や学習活動の設定、学習過程で予測される反応やつまづきを踏まえた発問、教材・教具や板書等の検討を行い、授業実践と改善を繰り返した。例えば、鳥取聾学校では、国語科において文章に沿って正しく読み取り、適切な言葉を選んだり、言葉の使い方を工夫したりしながら表現する力を育てるため、発問を視点に学びを深める指導・支援の工夫を行っている（資料1）。

P l a n (事前検討会)	読み取りに関する実態把握をもとに、個々の児童の実態に応じた指導方法や支援方法を検討
D o (授業実践)	事前検討会をもとに計画した授業案を実践
C h e c k (事後研究会)	<p>発問を視点とし、本時目標へ迫れたか、実態把握や指導・支援の工夫は適切であったかを協議</p> <p>★発問に焦点を絞った授業改善の視点</p> <p>① 学習のねらいに迫る発問だったか</p> <p>② 明瞭な言葉で発問し、その意味が児童に理解できるようにしているか</p> <p>③ 児童の実態や反応に合わせて、より深く学べるための補助的・発展的発問をしているか</p> <p>○基礎的・基本的事項の着実な定着</p> <p>○深い学びの実現に向けた発問の工夫</p>
A c t i o n (授業改善)	事後研究会の協議をもとに、さらに授業改善につなげる授業改善の繰り返しにより、実態把握や児童理解の深化、有効な指導・支援の精選を促進

資料1 PDCA サイクルの授業づくり（鳥取聾学校の例）

### 観点 3:

### 個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

#### 3. 習得した知識及び技能が生きて働く授業の工夫

平成29年度と同様に、聴覚障害のある幼児児童生徒の共通した実態を踏まえた授業づくりの基本的な留意事項をまとめた「鳥聾・ひまわり分校スタンダード」を、年度初めに全教職員で共有するとともに、新たに定期的な自己評価に活用することで授業づくりの基礎的環境整備をはかっている（資料2, 3）。「鳥聾・ひまわり分校スタンダード」を用いて聴覚障害児に対する授業の工夫・配慮事項を共通理解するだけでなく、教員の自己評価や授業参観の視点として活用することで、鳥取聾学校の専門性の維持に役立てるツールとなっている。また、ひまわり分校では、幼稚部、小学部低学年、小学部高学年、中学部の段階でめざす姿と認知・思考の流れを表で作成し、各年齢段階でめざす幼児児童生徒の思考する姿を明確にすることによって、学校全体や学部レベルで共通で理解できるようにしている。

#### 鳥取聾学校スタンダード(教師用)

定期的に目を通しましょう。  
チェックの仕方は自由です。自分の分かる方法で行ってください。  
学部研で時間をとって行いますので、各自で保管をお願いします。

#### < 授業編 >

##### 1 話し方・やりとり

##### 1 視線を引きつける方法

6月 9月 11月 1月

(1) 話し始めに注意を促し、全員の子どもの視線が集まるまで待ってから話し始める。				
(2) 教師は発言者がだれか分かるように配慮する。				

##### 2 分かりやすい話し方

6月 9月 11月 1月

(1) 表情豊かに、身振りや手話、指文字、キューサイン、文字など手がかりになるものを交えながら話す。				
(2) 興味を持って話が聞けるようメリハリのある話し方を工夫する。				
(3) はじめに、話のテーマやキーワード、目的、内容、留意点などを伝えておく。				
(4) 話が長くなる場合は、「今から、〇つ話をします。1つ目は、・・・、2つ目は、・・・」と指で何番目の話を表す。				
(5) 聴覚活用やコミュニケーションの状況を把握し、きき取りやすい声の大きさと、少しゆっくり、はっきりと話す。				
(6) 言葉を区切るときは、文節のレベルで切って話す。「あ・おい・くる・ま」と言うのではなく、「あおいくるま」と言う。				
(7) 話の口形がゆがんでしまうので、口の動きを誇張しすぎたり、大声を出したりしない。				
(8) 子どもとの距離や角度などに気を配り、口元や手話が見やすいように、適切な位置で話す。				
(9) 教師が光を背にして逆光になると、子どもから見て教師の姿が暗くんだり眩しくなったりするので、話し手は太陽に向かって立つようにする。				
(10) できるだけ静かなところで話す。				
(11) 話したことがきちんと伝わっているか確かめる。模倣や復唱を促すことも効果的である。				
(12) 話をするとき、立ち止まり、黒板を向きながら話さないようにする。				
(13) 黒板の図などを説明する時には、視線移動が少なくなるよう、その図の近くで行う。				
(14) ある程度まとめて説明をするともに、ノートを書く時間を保障する。				

平成30年度 教育研究部

#### 「ひまわりスタンダード」

～鳥取聾学校ひまわり分校の大切にしたいもの～

#### ひとりひとりの実態に応じた関わり

- ・年齢に応じた手話の使用
- ・子どもの行動や経験の言語化
- ・単語ではなく、**文章表現**での会話を（助詞まで大切に）
- ・はっきりとした**口形**、適度な**声量**、わかりやすい**手話**

#### まっことが大事

- ・子どもからの**発意を待つ**→言葉を取らせない
- ・こちらの発意は**子どもの視線が向いてから**
- ・子どもの**心に寄り添い**、話を共感的にきく姿勢
- ・「**楽しさと しつこと ねばり強さと**」…聾学校教員の本質

#### わかる授業づくり

- ・「この1時間で学ぶこと」を明確に→「**ゆめて**」の掲示
- ・**視覚資料**の活用→絵、図、写真、表、手話のイラスト等の提示でイメージしやすく
- ・学習の流れがわかる**教書**→1時間に板書1枚
- ・学習に必要な言葉、重要な単語は『**文字**』と『**手話**』で
- ・**発音**の工夫→ゆさぶりをかけて思考を深める！
- ・**動作化**、**劇化**を取り入れて

#### りよう(量)より質

- ・子どもの情報入り口は狭い→子どもが**受け止めやすい**手段と内容で伝える
- ・子どもの**心をくみ取った**言葉かけ
- ・適切な**教室環境**・**廊下掲示**  
→情報量を抑えた前面掲示と、学習内容を活かす動的な背面・廊下掲示
- ・教員自身が良質な**言語モデル**・**行動モデル**に！



#### 資料2 鳥聾スタンダード

#### 資料3 ひまわりスタンダード

**観点4：****障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定**

記載なし

**観点5：****多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施****5. 自己評価表を用いた振り返り活動の充実**

ひまわり分校では、授業の「ふりかえりシート」を用いて、めざす姿に関して自己評価と他者評価を行っている。めざす姿については、教員がキャリアの発達段階表を用いてある程度の目標を設定し、児童生徒と相談することにより目標を決めている（資料4）。

平成30年度には、思考を促す学習活動や発問を工夫することで、幼児児童生徒が自ら気づき、考える姿が増えたり、学習の振り返りの内容が充実したりといった効果が得られている。

月 日( )		自己評価	他者評価
め ざ す 姿	①	めあてを達成することができた。	
	②	これまでに学習したことを思い出したり、活用したりして、今日の学習ができた。	
	③	先生の問いかけに対して、 <u>適切に応える</u> ことができた。 (発表、説明、行動、書く など)	
	④	教科書、ノート、ドリル、プリント、辞書などから学習に必要な情報を探して見つけることができた。	
	⑤	今日の学習でわかったことを、手話や文章で説明することができる。	
<考えが深まったこと> 例:授業の初めと終わりで自分の考えが変わったこと, 授業中に考えたこと, 工夫したこと など     <先生からのコメント>			

自分の力でできた…◎ サポートを受けてできた…○ 難しい、できなかった…△

**資料4 ふりかえりシート**

## 観点 6：

### 新学習指導要領に対応した特色ある取組

#### 6. 「思考をくすぐる6つの活動」

幼児児童生徒の思考活動を比較・順序・類別・理由付け・定義づけ・推理の6つの項目に位置づけ、これらを「思考をくすぐる6つの活動」として授業に取り入れた（資料5，櫻本，1995）。幼児児童生徒のめざす姿がイメージしやすくなり、具体的な発問につながれると考えられる。これにより、教科の特性や本時のねらいに即して適切に学習活動を設定するとともに、学習指導案についても幼児児童生徒の思考を視点にした様式に改め授業実践することで、短絡的・一面的になりがちな思考から習得した知識及び技能を働かせる思考への転換をはかっている。この「思考をくすぐる6つの活動」を教科や日々の活動の中で意識して取り入れている。

項目	内容
比較	いくつかの物事を、同じところ、違うところ、似たところなどに目をつけて比べ、性質や特徴を明らかにする力 ex ○○と△△を
順序	物事の手順、時間・空間・因果・関心の強さや重要さなどで順序づける力 ex 時間軸上で整理する
類別	目的にあう観点を決めて、いくつかの物事を他と区別したりまとめたりする力、また類や層を明らかにする力 ex なかま分け、グルーピング
理由付け	物事の結果を引き起こした原因・判断を下した主な理由・連鎖や循環をなす因果関係などを明らかにする力 ex なぜかというと
定義づけ	物事を抽象化して表したり簡略に表したりする力、また、そのような言葉の意味内容を明らかにする力 ex だから○○です
推理	知識や経験をもとにして、「知らない・わからない・これから」などの事物について、筋道を立てて推し測る力 ex 予想

資料5 思考をくすぐる6つの活動

櫻本 明美（1995）． 説明的表現の授業—考えて書く力を育てる 明治図書出版